会報 文化財保存新潟県協議会
第６０号
2016年10月19日発行

「なんだ、コレは！」の感動を地域振興に･･･

火焔型土器と日本遺産を考えた第18回大会

７月31日（日）、新潟市歴史博物館（みなとぴあ）２階セミナー室において、文新協第18回大会が開かれ、多くの市民とともに「日本遺産」について学び、考えました。テーマは「日本遺産と火焔型土器 ～地域の魅力発信を期待される文化財～」。火焔型土器ならこのお二人、ともいうべき長岡市立科学博物館館長の小熊博史さんと十日町市博物館副館長の石原正敏さんをお呼びして、まだ聞きなれない「日本遺産」についてお話しいただきました。

今年４月、ストーリー「なんだ、コレは！信濃川流域の火焔型土器と雪国の文化」が県内初の日本遺産として認定されました。それに深くかかわってきたのが、小熊さんと石原さんです。小熊さんからは、日本遺産とはそもそも何か、どのように認定されていったのか、という基礎的なお話とともに、長岡市が具体的にそれをどのように活用しようとしているのかを説明していただきました。「火焔型土器」ではなく、「火焔土器」がただ一つあることを歴史的に紐解いていきました。石原さんは、十日町に即して日本遺産の意義を語っていただきました。十日町という地域の自然と文化を前提に、遺跡を考古学的に、文化財的に位置づけるとどのようになるのか、笹山遺跡を例にとりながら説明してくれました。特に笹山遺跡ではすでに住民が参加するかたちでの遺跡の活用と保存が進んでいます。それを、画像を交えながら、具体的にお話しされました。

日本遺産と「火焔土器」について詳しく説明した小熊さん

様々なエピソードを交え、地域の魅力を語った石原さん

さて、二人のお話をまとめてみましょう。「日本遺産」とは何か。まず、世界遺産の日本版というわけではありません。日本遺産の特徴は「ストーリー」があることです。保存することだけを目的にせず、地域の活性化や観光資源としての役割を持つことができる特徴を備えていなければなりません。また、日本の伝統や文化を語るものにもなっていなければなりません。つまり、世界にも発信できる力を持つということです。

二つ目は、一地域や個別の遺跡だけではなく、遺跡や文化財を連携させ、シリアル型では複数の自治体が、地域型では一地域の自治体がかかわっていくという形を持つことです。シ

リアル型である「信濃川流域の火焔型土器と雪国の文化」では、土器の芸術性と、今でも縄文文化を受け継ぐとされる食糧の加工・保存技術、アンギン、土器製作の技術などが、信濃川流域に濃厚に分布していることが評価されています。ストーリーの構成要素として60に及ぶ遺跡や文化財・自然景観が認定されています。津南町から新潟市にかけての５自治体が連携し、それぞれの文化財を活用しながら、ストーリーを形成しています。

二人のお話を伺って、二つのことに気が付きました。長岡は「火焔土器」を発見したところとして誇りを持っているということ。この土器は、その芸術性、歴史の古さという点で世界を驚愕させてきました。まさに、日本文化の大使として世界を駆け巡っています。その誇りをバックに地域での活用が進んでいると感じました。十日町では出土遺物が国宝となった笹山遺跡を地域住民とともに保存し、祭りなど定例化された取り組みを続けながら、遺跡がしっかりと地域のものになっているということ。それぞれの地域が積極的な取り組みをしながら、それらが、互いに啓発しあって新しいかたちの保存活用を模索している姿を見ることができました。　　（川上真紀子）

橋本会長あいさつ。50名を超える参加者。

【参加者の感想】

〇現在の県や市のとりくみがよくわかった。資料が素晴らしく、今後の参考書として利用していきたいです。

〇「日本遺産」のことをはじめて知りました。この講演会のおかげです。おおいに参考になりました。信濃川火焔街道連携協議会もはじめてでした。今後の発展を期待しております。

〇森浩一先生が“遺跡（遺物）”は地域を元気にする、といっておられましたが、この講演で実感をしました。特に十日町市の取り組みに強く感じました。

〇日本遺産について、様々な観点から現状を知ることができてよかった。

〇とてもためになる内容だと感じました。来てよかったと思います。

〇こういった遺跡や文化財の活用は、遺跡に関する知識がないとできないと感じたので、この問題に関わっていくにはもっと知識が必要だと感じました。

〇火焔型土器から始まり、近年の地域振興に役立てていこうとする話が多く、大変興味深く聴かせていただきました。最近、私の方でも、考古学の成果から地域にどういった影響を与え貢献ができるのだろうかということを考えており、本講演においてはお二方ともに、日本、もしくは世界遺産として認定されることでの影響力、国体のパンフレットの表紙のように、地域の顔として扱うことで、地域を知ってもらうきっかけとして活用していけるとおっしゃっていて、考古学にも多面で地域に貢献することも可能なのだと感じることができました。

〇火焔土器、火焔型土器が出土している新潟に住んでいることを誇りに思える講座でしたし、理解も深まりました。前から馬高縄文館には行きたかったのですが、ますます行きたくなりました。十日町博物館も遠いですが、面白そうです。携わっておられる方々の取り組みも素晴らしいですね。2020年オリンピック聖火台に採用されたら超うれしいです。

〇火焔（型）土器に関するエピソードを期待していました。多く関連するお話が聞けて、楽しい一時でした。

〇経済振興の一環として、文化財活用を動員される時代。逆手にとれば文化財の理解を進めやすくできる条件にもつながるのだなぁとつくづく思いました。ただ、「火焔土器＝日本の文化の源流」というのはいかがなものでしょうか。縄文時代の一時期にあった型式であり、生業、精神文化、気候的背景etc．おさえておさえて発信しないと誤解につながらないか？

〇縄文人と火焔型土器との出逢いについて、なぜ縄文人が「火焔」土器なるモノを造ったのだろうかという部分がもう少し知りたいと思った。中国大陸にはコノヨウなモノが同時代に発掘されているのでしょうか。又、世界的にはどうなのか等、チョット気になったものです。

橋本会長の代表委員就任、来年は新潟で全国大会･･･

重要決定のあった文全協第47回佐賀大会の報告

木村英祐

去る6月17日（金）から19日（日）の３日間、恒例の文化財保存全国協議会（文全協）大会が佐賀県佐賀市を会場に開催されました。４月に発生した熊本地震の被害が気になるなか行われた総会・全国委員会、見学会、大会の様子を報告します。

■会員拡大の取り組みが急がれる中、橋本代表委員就任

１日目に行われた全国委員会・総会では、１年間の文全協の活動をふりかえり、2016年度の運動方針を協議しました。そして、ご当地佐賀県吉野ヶ里遺跡のメガソーラー問題や県立吉野ヶ里博物館の建設要望についての議論、京都市下鴨神社糺の森のマンション建設問題、世界遺産平城京の現況など、全国各地の遺跡保存問題について情報交換をしました。また、事務局移転の経費の問題、会の規約の改正などについて議論しました。会員の高齢化などにともなう会員減少もあり、財政状況も厳しさを増しています。新たな会員を増やす方法についても話し合いました。

また、総会後の全国委員会では2016･2017年度の代表委員・事務局長・会計・常任委員を選出しましたが、２名の代表委員には、小笠原好彦さん（留任）とともに新たに橋本博文本会会長（新潟大学教授）が選出されました。代表委員は東日本と西日本からひとりずつが選出され、文字通り文全協の代表で「全国の文化財保存運動の顔」です。故甘粕健本会前会長も長くつとめた要職です。新潟の会員全体で橋本代表委員を支えていきたいと思います。

■九州北部の弥生遺跡、そして国指定が決定した縄文遺跡に感動！

２日目、「佐賀・福岡の遺跡を巡る」と題して行われた遺跡見学会には、大型バスいっぱいの参加者が集いました。九州北部の遺跡を見るのを楽しみにやってきた全国の会員はもちろん、地元佐賀県の参加者もたくさんいらっしゃいました。

まずは、福岡県に入り糸島市の平原遺跡を訪ねました。国内最大の内行花文鏡を出土した「平原王墓」、それら周辺の遺跡からの出土品を展示する「糸島市立伊都国歴史博物館」を見学し、『魏志倭人伝』の風景を実感しました。昼食後、バスは再び佐賀県へ。この日、『佐賀新聞』朝刊で「東明遺跡、国史跡に」と報じられた日本最古の湿地性貝塚といわれる縄文時代早期の遺跡、佐賀市東明遺跡を訪ねました。最後は、今回の見学会のメイン、吉野ヶ里歴史公園（神埼市・吉野ヶ里町）です。東口から入った一行は「南内郭」で記念撮影。全体的な説明を聞いたあと、思い思いに歴史公園を散策しました。しかし、広い公園内を回るには時間が足りません･･･。

夜は恒例の懇親会。吉野ヶ里遺跡がある神埼市の市長、吉野ヶ里町の町長、今回の大会開催にご尽力いただいた現地実行委員のみなさんを囲み、全国の仲間たちと交流を深めました。

博物館で「平原王墓」の調査の様子を実感

国史跡に指定された東名遺跡について説明

吉野ヶ里遺跡で記念撮影

見学会後の懇親会のひとこま
民俗芸能「面浮立（めんぶりゅう）」で歓迎

■弥生の集落遺跡をテーマに150名の市民が参加した大会

最終日の大会には全国の会員のほか、多くの地元市民・研究者が参加しました。急遽報告が決まった熊本地震の被害に関する報告のほか、地元吉野ヶ里遺跡に関する記念講演や現状報告、弥生の集落遺跡に関する事例報告などに約150名の市民が耳を傾けました。

大会テーマ 「弥生時代の集落遺跡と遺跡群の保存・活用－北部九州の弥生遺跡を世界遺産に－」

特別報告「熊本地震による文化財被害の現状と課題」杉井健氏（熊本大学文学部）
記念講演「吉野ヶ里遺跡の価値と保存」高島忠平氏(佐賀女子短期大学元学長)
報告①「佐賀県吉野ヶ里遺跡の現状と文化財保護の課題」池永 修氏(吉野ヶ里弁護団・弁護士)
報告②「長崎県原の辻遺跡の保存整備と活用」松見裕二氏(壱岐市教育委員会文化財課 学芸員)
報告③「鳥取県妻木晩田遺跡の保存整備と活用」浜田竜彦氏(鳥取県埋蔵文化財センター 係長)
報告④「新潟県弥生集落遺跡群の保存整備と活用」橋本博文氏(新潟大学教授)
報告⑤「イギリス ヒルフォート遺跡の保存整備と活用」 新納 泉氏(岡山大学教授)

※本報告は、文化財保存全国協議会ホームページに木村が寄せた文章を一部加筆・修正しました。くわしくは、文全協ホームページ、「文全協ニュース」No.209をご覧ください。

文全協第48回新潟大会の第1回実行委員会を開催！

来年度全国大会の新潟での開催決定を受けて、10月8日（土）、新潟市万代市民会館にて「第48回新潟大会（仮称）第１回実行委員会」を開催しました。前回、第29回新潟大会は「市民のための文化財保存－21世紀への展望－」という大きなテーマを掲げ、新たな取り組みにチャレンジし、見学会への参加者150名、大会もそれを上回る市民が参加し、たくさんの感動を共有することができました。来年は「次代に引き継ぐ文化財保存運動（仮)」をテーマに、前回以上の大会を目指すことが確認されました。約20年ぶりの新潟での大会を盛り上げるために、ぜひともご協力ください。

編集後記 この『会報』は文全協会員でなくても、文新協行事に参加された方には可能な限りお送りしています（ご参加なき場合は郵送を取りやめる場合があります)。名簿は本会からの連絡にのみ使用し、個人情報保護に留意し厳正に管理しています。会報送付がご迷惑な方は事務局までご一報下さい。

文化財保存新潟県協議会事務局（入会についてのお問い合わせも）
電話：090-2735-5536
Ｅ－ｍａｉｌ：bun-sin-kyou@js8.so-net.ne.jp
ホームページ：http://www014.upp.so-net.ne.jp/bunsin-k/

文全協のホームページもぜひご覧ください。